



理想郷の輝き

― 七宝 荒磯 花文 水指 ―

写真の茶道具は、胴部に、波間に躍る魚の荒磯文と四弁花文を交互に描いた七宝製の水指です。見込(内側の底)にも荒磯文が大胆に配されており、その周囲は花唐草文が巡っています。中国の明時代(1368~1644)の作品です。彼の地で鉢として制作されたものを日本に輸入し、塗蓋を添えて茶道具の水指に見立てました。彦根藩主井伊家に伝わった茶道具の中で、ひときわ鮮やかに異彩を放つ作品です。

七宝焼は、銅や真鍮など金属製の器の表面にガラス質の釉薬を着け、窯で焼き付けて研磨したものです。七宝焼の名のおこりでもある色鮮やかな釉薬は、ガラス質に赤であれば酸化鉄、青ならば酸化銅といった酸化物を混入することによって多彩な七宝釉を得ることができます。

七宝釉を施す際に、釉薬が混ざり合わないように個々の色ごとに区画する必要がありますが、細い金属紐で縁取

って釉薬を詰める手法を有線七宝と言います。写真の水指は、その有線七宝の手法で制作されたものであり、金属紐は器と同じ真鍮が用いられています。

ところで、日本で七宝と称しているこの種の製品は、英語では「エナメル」、中国語では「琺瑯」と呼び、その起源は西アジアともヨーロッパともされて、いまだ明確ではありません。日本の場合には、七世紀の古墳からの出土例が最古で、正倉院には精巧な七宝製の鏡も伝来しています。これらが中国製か日本製なのか論議の分かれるところですが、この時期に国産の萌芽があった可能性が指摘されています。ところが中世に入ると、その芽は早くも枯れて、もっぱら中国からの輸入、つまり唐物に依存するようになりました。写真のような作品が、日本人の求めに応じて、幾つとなくわが国にもたらされました。

これらを今日のように七宝と呼ぶようになるのは、実はこのころのことです。その淵源は仏教の教典にあります。教典では、極楽浄土の世界を荘厳する珠寶として「七宝」の語が用いられました。七宝は本来、理想郷を色鮮やかに飾るものだったのです。当時の人々は、自国にはない鮮麗な輝きを発するこの製品に憧れをいだき、それがつって、もともと架空であるはずの七宝の名を与えることになったのでしよう。言い得て妙、この命名に優るものはないと言えます。

七宝焼の名が世に広まった後も、唐物に依存する時代は続きました。そして、再び七宝がわが国で制作されるようになるのは、近世を迎えてからのことでした。

(彦根城博物館学芸員 谷口 徹)

七宝荒磯花文水指 (彦根城博物館蔵)



写真の水指は、彦根城博物館の常設展「数寄の世界」で3月7日(金)から4月8日(火)まで展示します(期間中無休)。